



No.48 2016.3

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次			
幹事長から	土木史フォーラムについて	鈴木 圭	1
フォーラム	当麻の境界に架ける橋	西村 謙司	2
学会の動き	第 1 回土木史サロン報告	緒方 英樹	11
	第 35 回土木史発表会に参加して	鈴木 圭	13
幹事長から			

土木史フォーラムの改定について

土木史研究委員会 広報小委員会幹事長 鈴木 圭

土木史フォーラムでは、これまでフォーラム、地域ニュース、学会の動き、土木史関係図書を 1 つの号にまとめて、NO.〇〇号という形で編集してきました。No.47 号では、土木史研究会への民間からのメンバーであり、土木史研究の発展に貢献された武部健一さんの特集して、フォーラムを編集し、特に、武部健一という人となり分かるように、関わりのあった方々に記事を執筆して頂きました。また、地域ニュースについては、Face book の活用によって、

随時、紹介されることもあり、これまでの掲載方法に合わなくなってきました。そこで、今後の土木史フォーラムの編集については、特に、それらをすべて揃えてからお知らせするのではなく、随時編集する形が、宜しいということになりましたので、No.48 号からは、これまでの形式ではなく、編集内容が随時変わってきますので、ご理解を頂きたいと思えます。

— フォーラム —

当麻の境界に架ける橋

日本文理大学 建築学科 准教授

西村 謙司

1. 架橋するという事

古来、橋は境界によって隔てられた二つの場所を繋ぐものとして構築されてきた。通常、境界は、川や谷、湖、海などによって形成されるが、その境界の隔たりが深いほど、境界によって分節された二つの場所の断絶の度合いも大きくなり、それに比して橋が架けられることの意義も大きくなる。これまでに多くの橋が架けられることによって、異なる場所を結ぶ道が通され、人や物、情報が行き交い、人々の生活が豊かになってきた。橋は、人々に多くの利益をもたらし、その地域を活性化する力をもっている。そのため、橋は、さまざまな人々の協力によって、かけがえのない公共のものとして作られてきた。

そのような橋の重要性を受けて、哲学者ジンメルは、「二つの場所のあいだにはじめて道を作った人びとは、もっとも偉大な人間的事業のひとつをなしとげた」（『橋と扉』）と言っている。そして、橋を架けることは、二つの場所を隔てる境界を越境する道の固定像をかたちづくるという奇蹟を生み出すことであり、そのような架橋行為は、人間固有の作業の頂点に達するとも言う。

ヨーロッパでは、「橋をつくる人」という意味を語源に持つ「Pontifex」という言葉があるが、その言葉は、通常、神官や聖職者を意味し、人間世界と聖なる世界を繋ぐ役割を担う人を示している。公共の橋をつくることによって、地域が活性化し、生活が豊かになるが、聖職者も聖なる世界への架橋によって人々の生活世界を稔りある

ものにするという同様の役割を担っているからであろう。さらには、聖職者自身が技術者として橋造りに参与していた事蹟もある。架橋行為によって、聖なる世界への繋がりが見出されるとともに、翻ってその関係性において、我々の生活世界が幸福にもたらされる可能性に開かれるからであろう。

2. 当麻寺練供養

さて、ここでは、そのような架橋による原初的意味を確認するために、創建年次は古いが、通常の橋と異なった形態をもつ橋を紹介したい。それは、奈良の当麻寺に架けられる来迎橋と呼ばれる橋である。

当麻寺では、毎年、二十五菩薩練供養という宗教儀礼が行われているが、その練供養が行われるときに、「来迎橋」

と呼ばれる橋が架けられている。規模は100mにわたるものであり、仮設とはいえ、大規模な建設行為が行われている。練供養にともなって営まれる一連の活動を通して、架橋行為の意味を確認してみたい。

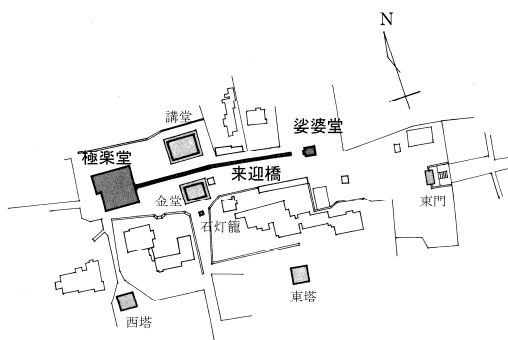
毎年5月14日に行われるこの法会は、千年前から行われており、面や装束をつけた菩薩講中の人々が、観音・勢至等の二十五菩薩になり、臨終を待つ中将姫を迎え極楽へ引導するという物語に沿って行われる。

次第は以下の通りである。当日の4時、菩薩講

中ふんする菩薩聖衆は、当麻寺の西方に位置する極楽堂から東方の100m以上離れた娑婆堂へ向けて中将姫を迎えるために「来迎橋」を渡る（配置図参照）。お練りの最後部では、観音・勢至が手足を同時に前後させる奉奏舞の型を繰り返しながら歩みを進め、来迎橋を渡って娑婆堂へ到着する。娑婆堂には、臨終を待つ中将姫を象った法如尼像が安置されており、極楽浄土への往生を待っている。法会の進行により、観音・勢至が娑婆の大地に降り立ち、中将姫を迎え入れると同時に、法如尼化生の尊像が現れ、極楽往生の奇蹟が知らされる。その後、化生の尊像とともに観音・勢至率いる菩薩聖衆は、西方へ向きを変え、再び「来迎橋」を渡って西の極楽堂へ還っていくというものである。

3. 当麻寺の伽藍配置と練供養の舞台構成

当麻寺の伽藍配置は、南北軸を主軸とする天平時代通行のものであり、南北軸上の北側に、金堂、講堂が配置され、南側に東塔と西塔が対照的に配されている（配置図参照）。練供養の舞台となる極楽堂は、曼荼羅堂とも呼ばれ、旧態の伽藍秩序と異なる概念によって配置されている。また、極楽堂（曼荼羅堂）から東へ100m離れたところに娑婆堂と呼ばれる建物が建てられている。そのた



当麻寺配置図

め現在の当麻寺は、他の寺院に類例の無いような伽藍配置となっている。

また、当麻寺は、扇状地の中腹部に位置し、境内は、西から東にゆるやかに傾斜して低くなっている。そのため、極楽堂の床面は、懸造のように前面が高く、地面から2mの高さにある。娑婆堂は、そこから東へ距離をおいて建てられているため、極楽堂と娑婆堂との間には高低差があり、両者の意味の違いが際立てられている。そのため、二つの建物の間に架けられる来迎橋は、西から東へゆるやかに傾斜した斜めの橋となっている。加えて、橋の西側は極楽堂の床に接合し、東側は地面につけられているため、敷地の高低差以上に橋の傾斜角はきつくなっている。写真で見ると、娑婆堂から極楽堂を見ると、来迎橋に沿って見上げるような位置に極楽堂があり、その背後に二上山が聳えて見える。二上山の西側には、飛鳥時代を築いた天皇や貴族達の墳墓が集められ、山によって囲われてできた奈良盆地の西方外側が死者の世界として意味づけられていたと考えられるため、境内に架けられる来迎橋は、死者の世界とこの世を媒介するという敷地に潜む場所の意味を担うことにもなっている。



娑婆堂から来迎橋を通して極楽堂を見る

4. 練供養で架けられる来迎橋の意味

練供養では、来迎橋が架けられることによって、極楽堂と娑婆堂の間を隔てる見えない境界が繋がれる。また、そこを中将姫の往生を知らせる法如尼化生像が通ることによって、娑婆世界から極楽浄土への往生の可能性が示されている。実際に、練供養における体験は、現実の娑婆世界において浄土からの来迎が現れることとして経験される可能性に開かれている。そのような非日常的な時の空間体験が現象し得るのは、来迎橋が、橋が元来有している異なる二つの場所を隔てつつ繋ぐという両義性に基づいて、極楽世界と娑婆世界の間を潜む見えない隔たりとしての境界を表示するとともに、断絶した両者をつなぐという両義的な意味をもつ支えとして造形化されているからであろう。とりわけここでは、来迎橋が上述したような特殊な形をしており、橋の両端の場所の意味が高度に差異化されながらも、その両者が橋の両義性を基底として繋がれることによって、娑婆世界において絶対の安らぎとしての極楽への往生という超越的な空間体験を成立させるという奇蹟的出来事を成就させている。すなわち、練供養が行われることによって、我々の世界を縁取り限定しているが通常はそれを見ることがない娑婆と浄土の「境界」が「来迎橋」という形ある物によって図化され、その境界の上で往生劇が演じられることによって、平板なモノに陥りがちな現実の日常世界が、意味のない閉塞した世界などではなく、「境界」によって限定されながらも「境界」を超える世界へと通じゆく可能性をもつことを示しているのである。練供養において架けられる「来迎橋」は、そうした日常世界に秘められた

世界の重層性を我々に垣間見せ、我々の生活世界が、厚みをもち深まりゆく可能性をもっていることを直接知らせてくれる＜導きの橋＞と言うことができよう。

5. 来迎橋の社会的意義

上述の＜導きの橋＞としての来迎橋は、普通の橋とは異なる形態をしているが、それを形作るのは、幅 1m45 cm長さ 2m70 cm厚さ 15 cm程の直方体の板片である。その板片 36 個が縦方向に繋がれて橋桁の上に載せられ、全長 100mの大橋となっている。その橋を形成する板片の側面には、「当麻講中」「勝根講中」などと、当麻寺周辺に分布する「菩薩講」と呼ばれる講組織の名前が記されている。講組織を構成する人々と講組織相互の結束によって、来迎橋が建設されていることを確認することができる。橋が架けられるのは、このような講組織の繋がりのおかげであり、毎年行われる架橋行為によって、改めて当麻寺周辺に広がるコミュニティの絆が結束していることを再確認し、さらにその絆の深まりを更新していると考えられる。練供養は、「講」という当麻寺近郊に点在する家のグループの集まり（個別の宗派に拠らない）によって行われているが、このような社会システムに注目して練供養を見ると、「来迎橋」の



来迎橋を渡る法如尼化生像と二十五菩薩

架橋という社会行為が、人間の命の限りを境界づける「死・生」という究極の共通性・連帯性に着眼して行われるアクチュアルな〈まちづくり〉のひとつのあり方を示しているように思われてくるのである。

一 土木史研究委員会のうごき 一

第1回「土木史サロン」の開催報告

土木史広報小委員会委員長 緒方英樹

土木史研究委員会主催、土木広報センター共催による第1回「土木史サロン」を、2015年11月11日（水）、土木学会講堂において開催した。

今回、土木史専門家というより、一般市民を対象にしたサロンを意図して、これからの私たちの暮らしにとって、国土づくりの歴史に何を学び、活かすかをテーマとした。身の回りや日本の歴史にある国土づくりの歴史から、一般住民が、どのように学び、親しみ、楽しむ契機を土木史は提供できるか、そしてその教訓や功罪をこれからの社会づくりにどう役立てていけるのかへの第1回アプローチでもあった。

抛って、土木の枠を超えた広報・集客を目指し、参加人数83名のうち、土木史研究者や関係者はもとより一般の歴史愛好家や、他分野の方々の参加が目立ったサロンとなった。講演やシンポジウムの詳細は、土木学会誌4月号に掲載されるということなので、ここでは貴重な講演を頂いた高橋裕氏について少し触れたい。

土木の歴史に学び、現在、そしてこれからの社会を考える

特別講演は、「流域管理の革新的概念の創出と水災害軽減への貢献」に対して2015年(第31回)日本国際賞を授賞された高橋裕氏（東京大学名誉教授）をお招きした。

講演のテーマは、「土木史的思考の意義と役割」

と題し、青山士や宮本武之輔を例に、大河津分水工事など地域の困難な課題にその熱意と技術で貢献した土木技術者をいかに顕彰して、土木への理解・感謝につなげていくかについて、具体的な顕彰活動とその可能性に言及された。高橋氏は、東大の助教授時代、青山士の亡くなる2年前に氏と同郷である静岡県磐田市の青山宅で直接話を伺ったことがあるという。日本では、技術者が故郷で有名になるのは、きわめて珍しいことである一方、英国のエンジニアであるブルネル（Isambard Kingdom Brunel、1806～1859）が2002年、BBCが行った「100名の最も偉大な英国人」投票で第2位となったことを例示された。ロンドン地下鉄パディントン駅のプラットフォームや郷里にはブルネルの銅像があるという。片や、日本の土木技術者たちが一般社会から正當に評価されていないこと、特に若年層からの教育にそうした学習や情報支援が手薄なことまで論究された。まずは、土木学会という存在を市民にアピールすることも大事だと提案された。高橋氏は、河川工学の第一人者としてだけでなく、土木史研究の発展に果



写真・1 土木史研究委員会 天野光一委員長の挨拶



写真・2 高橋裕氏による特別講演

たしてきた功績も顕著で、1950年代から土木史の重要性を主張してこられた。当時、大学のカリキュラムに土木史を組み込むことの困難さについて内幕話を交えてお話しいただいた。高橋氏が土木学会の理事時代、広報委員会や土木史委員会をつくることを理事会に提案したときは、非常に評判が悪かったという。そんな状況下、理事を一人ずつ説得して回るなど高橋氏らの熱意溢れる端緒から現在、大学の土木系学部で土木史の講座が常設されているところは少ないなど、その状況は建築史などに比しても厳しい状況はあるだろう。現在も土木技術者が一般に知られていない原因としては、学校で土木史を教えないことも大きいと指摘され、「大学教員の中に、現場で何年も働いた人を採り、現場を見ることも必須にするべきではないか」、「土木史というのは、単なる歴史の羅列ではなく、技術者の生き様を伝えること」など重要視された。

さらに、高橋氏は、『日本土木史・大正元年～昭和15年』、『日本土木史・昭和16年～昭和40年』の編集に携わられ、土木学会に日本土木史研究委員会設置にも尽力された大恩人でもある。

高橋氏は、土木史の教科書とも言える『現代日本土木史』でも主張されているように、時代の転換期にこそ、人々が自然と向き合ってきた歴史を顧み、思考や発想を鍛えて、そこから現在、そしてこれからの道筋と教訓を得ることが肝要とする「土木史的思考」の意義を強調されてきた。そうした強い思いから、最後に、土木の歴史をきちんと理解した上で土木の意義を「一般の人たち、専門外の人たちに伝えることのできる人を増やすこと」が肝要と締めくくられたことを銘記したい。

講演に引き続き、東北大学大学院工科研究科准教授で土木学会選奨土木遺産選考委員会東北支部委員など務めておられる後藤光亀氏から、「東日本大震災被害状況調査からの教訓」と題した報告がなされた。

上映した「水とたたかった戦国の武将たち」（監修/高橋裕、企画・脚本/緒方英樹、製作/虫プロダクション、20分）は、第20回土木学会映画・ビデオコンクール優秀賞受賞作品。「私たちの暮らしと土木シリーズ」の中の一本で、武田信玄ら戦国武将たちを土木の視点から描いたアニメーション映像だ。本シリーズは、若年層に土木の歴史をアニメと実写映像で提供し、土木とは、私たちの生活を支え、国土を保全し、環境を守るための最も基本的で重要な、しかも夢とロマン溢れる仕事であることを伝え



写真-3 「水とたたかった戦国の武将たち」より



写真-4 会場とも白熱したパネルディスカッション

ることにある。そのための物語は、日本の国づくりがなぜ、どんな人たちによってどのように進められたのかを学べる教育用として構築した。パネルディスカッションでは、土木の歴史を研究した成果を、いかに一般社会へ知らせ、共有していくかをテーマに議論が進められた。

パネリストは、以下の方々である。(敬称略)

高橋 裕 (東京大学名誉教授)

後藤光亀 (東北大学大学院工学研究科准教授・
土木学会選奨土木遺産選考委員会委員)

緒方英樹 (土木史広報小委員会委員長)

中野朱美 (日本ダム協会 参事)

コーディネーター

岡田 昌彰 (近畿大学 理工学部社会環境工学科
教授、土木史研究委員会幹事長)

土木史サロンは、今後も皆さまのご提案や企画も取り入れさせて頂きながら、地道に継続していくことで、高橋氏の提起された「一般の人たち、専門外の人たちに土木の意義と役割に伝えること」に繋がると考える

編集後記

今回フォーラムでは、日本建築を研究されている西村謙司様に、当麻寺（たいまでら）の境界に架ける橋と題して執筆して頂きました。また、当委員会の活動報告として、次期委員長に就任される緒方秀樹氏発案による「土木史サロン」について執筆頂きました。N0.39号からNo.47号までは、鈴木が土木史とデザインをテーマとして掲載してきましたが、次回から緒方英樹氏にバトンタッチ致します。土木史サロンも年1回の開催となり、新たな行事が増えたことは、大変喜ばしいことだと思います。なお、土木史フォーラムの編集にあたり伊能浩様には長期に亘り多大な貢献をして頂いたことに感謝の意を表します。（鈴木）

土木史フォーラム No. 48

監 修：土木学会 土木史研究委員会

発 行：土木史広報小委員会
代表者 鈴木 圭

事務局：伊納 浩

Email : ino-h@tokencon.co.jp

土木史フォーラムHP

<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/forum/>

CONTENTS

MESSAGE FROM THE CHIRMAN OF THE ADVERTISEMENT SUBCOMMITTEE	SUZUKI Kei	1
・ For the renewal of the forum of civil engineering history		
FORUM	KENJI NISHIMURA	2
・ Bridge over the boundary of the Taima temple		
MOVEMENT OF THE COMMITTEE	HIDEKI OGATA	6
・ The report of the 1 st Civil Engineering History Salon		